

Special!

異なるジャンルを専門とする
教員による
スペシャル対談コンテンツ

ファッション という枠 を超えて。



造形学部
建築・インテリア学科
浅沼 由紀 教授

横浜国立大学工学部建築学科卒業、東京工業大学大学院総合理工学研究科修士課程修了。武蔵工業大学にて学位取得、博士(工学)。一級建築士、インテリアコーディネーター、福祉住環境コーディネーター。文化・住環境学研究所長。



服装学部
ファッションクリエイション学科
佐藤 真理子 教授

お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士課程修了。温熱生理学、被服衛生学、人間工学等に基づいた衣服の快適性と機能性に関する研究に従事。博士(学術)。日本家政学会被服衛生学部会奨励賞受賞。

「住環境」と「衣環境」

「衣」も「住」も、心地よさなど
“新たな機能”をつくりだす時代へ。

トレンドやデザインだけではなく、衣服や住居には「人を守る」という大きな役割がある。その研究は、心地よさの追求やユニバーサルデザインの実現などに形を変え、日々進化を続けている。「衣」と「住」の環境学とその役割を、最先端の研究から考える。



住環境も衣環境も
人の温熱的快適性を保っている

浅沼：そもそも住宅とは、雨、風、日射といった自然や外敵から身を守るシェルターでした。いままでは断熱性や気密性といった性能も上がり、夏の暑さや冬の寒さの中で、いかに室内の温熱環境を快適に保つかが重要になっていて、そこは衣環境とも共通しているのではないのでしょうか。

佐藤：そうですね。衣服も言ってみればポータブルな空調設備です。衣環境の快

適性研究では、衣服内の温度が $32 \pm 1^{\circ}\text{C}$ 、湿度 60% RH 以下に保たれていれば、人は心地よさを感じる可能性が高いとわかっています。「衣服は第二の皮膚」とも言われ、人間に最も身近な微環境を形成し、暑さや寒さから私たちを守っています。その外側にあるのが室内環境と言えるでしょう。

浅沼：衣服は肌に直接触れるものなので、温熱的快適性のほかにも、いろいろな機能が求められるのでしょうか。

佐藤：その通りです。温熱的快適性以外にも、肌触りといった皮膚感覚による着心地、動きやすさや衣服圧に関わる運動機能などが衣服に求められます。近年の衣素材の進化はめざましく、着用するだけで心拍数やカロリー消費量などを測定できる高性能衣服も登場しています。こうした新素材の役割は、デザインと同じく、あるいはそれ以上にファッションを左右する重要な要素ですから、学生にはさまざまな素材特性や衣服の新しい機能性について学ぶことの大切さを伝えています。

浅沼：住宅分野でも高性能化は進んでいます。その一方で、東日本大震災のとき、エネルギーを使用した人工的な環境に頼

り過ぎたことへの反省から、自然の風光を取り込んだり、地域の気候・風土に合った住宅デザインや住まい方も見直されていますね。



佐藤：なるほど。地域の風土、文化といった点では、それらの知恵が詰まった民族服も機能性研究の対象です。私の研究テーマのひとつは袴ですが、袴の前には10本の襷、左右には投げと呼ばれる開口部があるため、そこから入る風と、襷のふいご作用(強制対流)により、衣服内の気流が攪拌され、暑熱下でも少し動けば涼しさを実感でき



ます。こうした民族服の優れた機能を再評価することも、未来のファッションを構築する際に重要であると考えています。

調査や実験で 深化するそれぞれの研究

浅沼：住環境に求められる機能とは、利便性、安全性、快適性などで、その目的は生活しやすい空間をつくることや、人々の生活の質(QOL)を向上させること。建築・インテリア学科では、家具や住宅メーカーなどと共同研究を行う以外にも、ライフスタイル研究分野では、これまでにない新しい住まい方を実践している方にインタビューを行う実地調査をしています。例えば、シェアハウスやコレクティブハウスで家族以外の人と住空間をシェアして暮らす人が増えています。こうした新しい生活形態の中から次世代の住宅のかたちを模索しています。これらの調査に参加することが、学生にはいい経験になっているようです。

佐藤：本学の衣環境研究では、温熱的快適性や運動機能性、着心地などの観点から、スポーツウェアやインナーウェア、制服、防護服など、さまざまな衣服の評価と提案

を行っています。その際、被験者実験だけでなく、サーマルマネキンという発汗ロボットにそれらの衣服を着用させ、熱抵抗や蒸発熱抵抗のデータを測定、活用しています。非常に多くの機器が備わっていますので、学生にも実験等で取り組んでもらっています。そのほか、近年の元気な高齢者を対象とする、シニア層向けの衣服の快適性研究も行っています。

あらゆる人にとって利用しやすい ユニバーサルデザインとは

浅沼：シニア向けという言葉が出ましたが、どの分野においても、高齢者や障がい者をはじめ、あらゆる人にとって利用しやすい生活環境づくり＝ユニバーサルデザインが求められていますね。このユニバーサルデザインの中でも、住宅の場合は、長く暮らしていくうちに生じる家族構成や年齢、身体状況の変化にも柔軟に対応できることが重要です。例えば、通常は、キッチン上部のシンクと下部の収納が一体型ですが、収納部の下にキャスターを取り付けて引き出せるようにしたら、車椅子の方や高齢者も座って水仕事ができるでしょう。このようなアダプタブル(順応型)な考え方を取り入れていくことが、これからの時代の住宅設計でますます大切になるでしょうね。

佐藤：ファッションの領域でもユニバーサルデザインの考え方は重要です。「ユニバーサルファッション企画設計」という授業では、パラリンピックに向けたウェア研究なども行っていますが、注目すべきは和装です。衣紋えもんの抜き方ひとつで涼しさを調節できる点や、どのような体型にも着付けにより対応でき、身体を服に合わせるのではなく、服を身体に合わせるという着方ができる点で、和装はユニバーサルデザインの考え方に合致しています。

本学だからこそ学べる 衣と住の環境学

佐藤：ファッションクリエイション学科には、将来ファッションデザインに携わりたいと入学してくる学生が多いです。ただ、服を着るのはマネキンでなく人間なので、人間の

身体特性を詳しく知る必要がありますし、その衣服を快適に着るうえでのさまざまな機能に関する実験データも必要とされます。こうした科学的アプローチも含め、幅広い観点からファッションを学べるのが、本学ならではの強みだと思います。

浅沼：建築・インテリア学科は、工学部にある建築学科と異なり、文系出身の学生が多く学んでいるのが特徴です。同じ学部にはデザイン・造形学科がありますし、ファッションを学ぶ学生とも日頃から身近に接することができます。学生には、こうした環境を生かして、「人」を中心に発想し、その周りの生活環境全体を考えたインテリアや建築の設計ができるようになってほしいと思っています。

佐藤：ファッションについても同感です。私の好きな言葉に「機能性即美」があります。たとえば仕事着は、作業しやすいだけでなく、それを着て働く姿が美しいといった機能性と美を兼ね備えているのが究極だと思うのです。そんなデザインを、若い感性をもつ皆さんと一緒にめざしていきたいですね。

Special!
ファッション
という枠
を超えて。



文化学園大学・短期大学部

服装学部 ファッションクリエイション学科 | ファッション社会学科 | 造形学部 デザイン・造形学科 | 繊維・インテリア学科 | 現代文化学部 国際文化・観光学科 | 国際ファッション文化学科 | 短期大学部 ファッション学科

